

薬剤師と地域包括ケアシステムとケア・カフェ®



®「ケア・カフェ」は登録された商標です

医療法人つくし会 南国病院 薬剤部長
川添 哲嗣

❖地域包括ケアシステムを支える多職種連携

「患者さんのためになる地域包括ケアを作るために、多職種連携をより一層進めつつ、医療・介護・福祉の質を上げるにはどうすればいいのか？」

このことを実現するために、この10年間、いろいろな勉強会や研修会の企画側に立って頑張ってきました。薬剤師会主催はもちろんのこと、高知県医療政策課・医事薬務課、高知県緩和ケア協会、高知県リハビリテーション研究会、高知県口のりハビリテーション研究会、医師会・歯科医師会、高知大学医学部、高知県立大学看護科、訪問看護ステーション連絡会、看護協会、介護支援専門員協会、歯科衛生士会、栄養士会など、コラボした機関は数多くあり、出会った多職種スタッフも数え切れないほどになっています。研修会の数は10年で100回以上やっているとわれ、そのうち3~4割の企画は主催側だったように記憶しています。



私の場合これらの研修会の成果として、「研修会で知り合った方々と実際の医療現場でコラボするときに非常にやりやすくなった」というものがあります。ただし、その理由は研

修会に参加したからだけではなく、多職種が一緒になって準備から開催までを行なったからだと思います。地域向けの大きな研修会を開催するためには、仕事が終わってから何度も集まりミーティングを重ねる必要があります。これだけでも連帯感は深まるのですが、研修会当日の緊張感と達成感を共有し、打ち上げ飲み会で盛り上がり、さらなる一体感を感じた瞬間に「職場は違えども地域の仲間」という意識が芽生えます。

最初は「顔の見える関係でやりやすくなったな」と感じる程度でしたが、連携実績を重ねるにつれて、仲間意識と信頼感はさらに増幅していき、ツーカーでチームケアを実践できるようになっていったように思います。そうすると「地域包括ケアシステムにおける多職種連携」という言葉を実感しながら実践する日々となるわけです。

❖ケア・カフェと地域包括ケア

さて、そんな流れの中で、2015年9月ケア・カフェ高知の開催を企画しました。「いろいろな研修会があるし、成果も出ているからそれでいいじゃないか」という声もあったのですが、とにかくやってみようということになりました。

私がこだわってケア・カフェをやりたかった理由には3つあります。

まず1つ目は、「ケア・カフェのディスカッションはアウトカム（結果、結論）を求め

ない」というコンセプトが新鮮だったからです。ワールドカフェやスマールグループディスカッション (SGD) を用いた多職種研修会は年に4~5回はやっていましたが、どれもアウトカムを求めるものでしたので、発言できる人とできない人ができてしまい、できない人は肩身が狭そうでした。「リラックスしたフリートークで行こう、お茶でも飲みながら。結論はいいから」という雰囲気の中で、何が生まれるのかを試してみたかったということです。

第1回開催にあたっては、旭川でケア・カフェを阿部代表とともに支えている薬剤師の堀籠氏にアドバイスをを受けつつ準備を進めていきました。立ち上げの経緯上、薬剤師会内に本部を置き、医事業務課、看護師、そしてケアマネジャーらとともに準備を行ないました。案内チラシは図に示している通り、明るく爽やかに作成しました。

当日は70名を超える参加者で、半分が薬剤師、残りが多職種でした。声かけの中心が薬剤師だったので薬剤師の数が多くなってしまいましたが、徐々にこの内容は拡散し、半数が多職種というのは嬉しいことでした。参加

者の中には視覚障害を抱える当事者の方もいて「薬に関して発言したい」と言ってくださるなど、地域への広がりを感じました。

そして何より嬉しかったのは、参加者の中から「楽しかった！私もケア・カフェをやりたい」と手を上げてくれた作業療法士が現れたことです。聞くところによると、病院内で多職種の壁が高すぎるように感じているので、この手法を用いて病院内とその周辺の医療介護職を巻き込んで地域開催をしていきたいとのことでした。

最初は大きい地域で行なっても良いのだと思います。徐々に地域包括の単位に分化していけば、まさにケア・カフェは地域包括ケアシステムの潤滑油になっていくのだろうと考えています。慌てることはありません。一緒にやろうとしてくれる人、将来の核となる人などがきっと現れます。そんなふうを考えて、最初の一步は気楽に始めていけば良いように思っています。

2つ目は、「アウトカムが要らないから幅広い職種や立場の人に参加を求めることができる」というより幅広い職種や立場の参加者が集うことを大切にする」ということです。つまり、研修会を企画するには開催母体が必ずあり、その母体が求める成果に沿った研修テーマになることは想像に難くないと思います。当然参加する面々も、そのテーマに関係の深い職種になっていき、テーマごとに職種に偏りが出るわけです。

例えば緩和ケア協会なら「在宅・病棟での緩和ケア」、高知大学医学部のがんプロ講座なら「がん」「看取り」、口のリハビリテーション研究会なら「口腔ケア」「摂食・嚥下」というテーマが中心となって、それぞれ多職種が集います。しかし、言語聴覚士は「口腔ケア」「摂食・嚥下」の会には出席しますが、「看取り」だと参加者はゼロになります。現場では圧倒的に数が多い理学療法士は、身体

第1回 ケアカフェ 高知
Blending Community

「ケアカフェ」は、まったく新しいコンセプトで、多職種・多職種者の集まりです。ジャンル別のカフェのような雰囲気の中で、コミュニケーションをとりながら、様々な悩みや課題の解決を目指します。

日時 平成27年9月27日(日) 13:30-16:30
(プログラム) 講演: 村上屋由美さん (医師、薬剤師、訪問看護ステーションシモトケ長) / ケアカフェ説明: 高知ケアカフェ実行委員会

場所 高知文化ホール7F (高知市本町3丁目1番1号)

テーマ 「飲み残し薬 (残薬)」

対象者 ケア提供者すべて
医師、看護師、薬剤師、福祉士、介護士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、社会福祉士、ボランティアなど

持ち物 名札: 普段職場で使っているもの
※お預かりの費用に、登録名刺(手書き)を念のためお持ちしています。
※お名前、お名前、コピー、マシンの使用は各自が責任をもちます。
(高知ケアカフェでは飲み残し薬を持ち寄りです)

申し込み 申し込み期間: 9月19日
FAX: 088-822-8734
この期の上、FAXしてください。
締め切り: 9月19日

参加費 無料

問い合わせ先 高知ケアカフェ実行委員会
高知ケアカフェ実行委員会
電話: 088-822-8734
FAX: 088-822-8734

図

リハが絡むテーマの時以外は参加しても肩身が狭いらしく、結果、あまり参加されません。他の職種も同じで、テーマによる偏りは仕方ないように思います。

薬剤師はどうでしょう。全部の会に出席する物好きな薬剤師は、私を含め高知では数名です。ほとんどの場合、薬が絡まないと出席されないの、リハビリの療法士や栄養士、歯科衛生士らと出会うことはほとんどないはず。つまりどの職種でも「発言できるイメージがあり、居場所が明確な研修会」を選んで参加しているということになるのでしょう。

ケア・カフェはその点を解消する力があります。「全ての人に発言権があり、居場所があり、職種の壁を超えた出会い」が有るからです。多職種が肩身狭くなく、リラックスして集合できる場所となり得ます。そんな場所を創出したかったことが開催2つ目の理由です。

最初の項目に書きましたが、まずは集うことが大切です。そこで細くても良いのでパイプができ、そのパイプが一人の患者さんを通して太く強固なものに変化していきます。そしてさらに横に連結していくのです。まるで神経回路が増えていく過程のように。

3つ目は、「流行を取り入れたかった」からです。なぜ短期間にこれほど全国各地に伝播したのか、自分自身でやってみて確かめたかったのです。ふざけた話と思われるかもしれませんが、石橋を叩いて渡らずの方もいる中、私は板橋を作りながら走る性格なので、やっしまえばあとは走りながらクリエイティブしていけばいいと考えたのが正直なところ。

❖まとめ

地域包括ケアシステムは絵に描いた餅ではありません。実際動いているシステムです。多職種から知られている群の薬剤師は、この

システムの中で大いに活躍しています。もしこの読者の中でその実感がない薬剤師がいるとすれば、それは残念なことに知られていない薬剤師の群に入ります。

「知られていない群は嫌だ！知ってほしい。でもどうやって？」と思われた方、その秘訣を今回長々と書いてきたので、ここまで読んでまだお分かりでない場合は今一度初めから読み返してください。

すでに多職種から知られていてご活躍中の薬剤師の方々には次のことをお願いします。

- 1) 地域の中で行われている多職種が集う研修に、地域の薬剤師をみんな誘ってほしい
- 2) 地域の多職種研修企画に加わって、症例検討はSGDやワールドカフェで行う提案を
- 3) ケア・カフェの定期的（隔月でも可）開催を提案して、楽しくつながりを作る

そして、今まで関わっていなかった薬剤師も徐々に仲間に入れてください。そうして地域に連携の輪を広げてください。地域で支えられる人の数を増やすことは、きっと地域住民のためになります。

ケア・カフェの目的は薬局の名前や薬剤師の顔を売るためではありません。職能を高めるためでもありません。最初は緩やかなつながりを生むことが目的であっても、最終的には地域の皆さんを支えるためにやっているのだということを決して忘れないようにしたいものです。主役は患者さんなのですから。

